
調査報告

「東アジア協力を担う次世代創造プロジェクト」中間報告

——タイ、ミャンマー現地調査報告を中心に——

高埜 健、上拂耕生、西谷 郁¹、牧 貴愛²

【構成】

序文——プロジェクトの趣旨

I タイ調査報告

II ミャンマー調査報告

III 在熊NPOによる日・タイ両国の社会福祉人材育成事業の課題

序文——プロジェクトの趣旨

本稿は、高埜を研究代表者とする平成21年度熊本県立大学地域貢献事業「東アジア協力を担う次世代創造プロジェクト——教育・文化を中心とする青少年国際交流のあり方を探る——」初年度事業の報告である。具体的には、西谷がタイで実施した調査研究報告、上拂がミャンマーで実施した調査研究報告、ならびに牧による熊本のNGO（非政府組織）活動に関する報告の3つの部分から

¹ 熊本県立大学非常勤講師

² 広島大学大学院教育学研究科教育学講座・教育研究補助職員

成っている。個々の報告は時期的にも調査国も対象も異なるため、一見全体の繋がりが無いように見受けられるであろうが、そこに共通するのは、「次世代創造」という観点である。ひとくちに次世代と言っても幅が広いが、10～20代のいわゆる青少年から30代後半くらいまでの成年層を世代的に含むと考えてよいであろう。

若者は、国と民族とを問わず、「未来からの留学生」である。とくに若年層の人口比率が高い開発途上諸国において彼らは、将来、自らの居住国のみならず、留学生や季節的労働力、あるいは移民として世界各地の発展を支える原動力となり得る。とくに20世紀最後の10年間以降、世界各地で「自由貿易」(Free Trade) からさらに一歩進んだ「包括的経済連携」(Economic Partnership) の取り決めが盛んに締結されるようになり、その先駆者たるヨーロッパに続いて北米やアジアでも、いわゆるモノ、カネだけでなく、ヒトの国境を越える動きにも拍車がかかるようになってきている。こうした世界的潮流のなかで日本も例外ではいられない。シンガポール、メキシコとの経済連携協定をはじめ、ASEAN (東南アジア諸国連合) 諸国、インド、オーストラリア、チリ、スイス、韓国とのあいだでも経済連携協定を締結したか、締結に向けて交渉を継続中である(2010年8月末現在)。こうしたなかで2009年9月の民主党政権発足以来、——賛否両論、様々あるが——将来の「東アジア共同体」の創設を見据えた日本のアジア政策について論じられる機会もまた多くなった。

2002年、当時の首相・小泉純一郎氏は、ASEAN + 3 (日中韓) 首脳シンガポール会議に出席した際、政策演説のなかで、日本とアジア諸国は「共に歩み共に進むコミュニティ」のメンバーであると述べた。その前年(2001年) ASEAN + 3 は、この東南アジアと北東アジアの13か国が「東アジア協力」を進めてゆくべき根拠のひとつに、「文化的規範および価値観に近似性がある」ことを挙げた(「東アジア・ヴィジョン・グループ」報告)。そもそも「東アジア協力」は、1997年アジア通貨危機の後始末のなかで、経済分野先行で始まり、

機能的協力を積み重ねていくなかで次第に実体化したものである。しかし、そのなかで、「東アジア共同体」構想が浮上し、2005年には「東アジア首脳会議」が発足した。地域のまとまり方として、「東アジア」なのか（単に）「アジア」なのか、あるいは「アジア太平洋」の方が相応しいのかは、現時点では必ずしも明確ではない。しかしながら、21世紀初頭の現在、アジアもまた、欧州連合（EU）をひとつのモデルとするような地域統合のプロセスにあることだけは間違いない。

だとすれば、アジア諸国が「共に歩み共に進む」なかで、そこに住む人びとが「近似した文化的規範および価値観」を基盤に、国境を越えて共通のアイデンティティを形成してゆくことになるのは必定である。また地域の将来を担う次世代を「共に育てて」ゆく必要も生じてくる。このことこそが、本プロジェクトの問題意識である。さらに付け加えるならば、その「共通のアイデンティティ」とは、あくまで現代的な文脈に即している。もちろん、伝統的な文脈における価値観（「個」よりも「集団」を優先する、あるいは、長幼の序を重んじる「儒教的」価値観等）を軽視するわけではなく、むしろそうした伝統的価値観の基盤の上に知識メディアや様々な活動や体験が共有されることによって、「現代アジア的」な共通アイデンティティが形成されてきていると言えるし、将来にわたっても、そうした傾向が発展的に続いてゆくであろうことが予測される。

本研究プロジェクトの調査対象は、青少年の教育・文化交流から、成年層における創造的活動・文化交流に至るまで幅広いものとなったが、初年度ということもあり、当初予定・計画していたことができなかつたり、また予想外にできたこともあつたりと、そういう意味で、本稿は試行錯誤の記録であると言ってよい。また本報告では、たまたまタイの事例が2件とミャンマーが1件となったが、そもそもは北東アジア・東南アジア全域を含む広義の東アジアを対象としており、他の国ぐに、あるいは日本国内の事例については、今後の継続

的課題としてゆきたい。また、最終的に、自治体、各種民間団体、NPO 等に対し、青少年層の文化活動や交流活動に関する提言ができればと願っている。諸般の事情により、本プロジェクトは熊本県立大学地域貢献事業としては単年度事業として終了し、2年目以降の継続の目処は立っていない。しかし、メンバー一同、本研究テーマは今後も必要なものであるとの共通認識は強く持っており、今年度の成果を土台として長期的視点に立ち、どういう形であれ研究を継続していく所存である。言い換えるならば、今後、我々が個別に（各自のテーマに則って）研究を続けていく場合にも、学術的研究の社会的貢献の側面において「次世代創造」という観点は欠くべからざるものとなろうということだ。

なお、本稿のⅠ・Ⅱ部については、2010年6月28日に熊本県立大学総合管理学部大演習室において報告会を行った。同報告会の開催にあたっては、熊本県立大学地域連携センターにお世話になったことを記して謝意を表したい。

（以上、高埜 健）

Ⅰ タイ調査報告

本調査研究の目的は、タイと東アジア他地域との交流の促進とネットワーク、現代文化、そして華人という2つの視点からタイを踏査し、考察を行うことであった。主に、バンコク首都圏やプーケットの文化施設、オルタナティブ・スペース、大学、商業施設を訪れ、諸機関の研究者やアーティスト、地域住民と交流し、インタビュー調査を行った。調査期間は2010（平成22）年3月2日から9日まで（7泊8日）であり、2010年3月2日から5日まではバンコク、5日から9日まではプーケットに滞在した。

本調査に際し、同時期にタイを訪れた片岡樹准教授（京都大学東南アジア研究センター）と同行させていただいたが、調査中のタイ語通訳をはじめ、廟や繁華街などの基礎的な情報提供から、フィールド・ワークにおける具体的な研

究方法に到るまで、多大なるご指導ご鞭撻を賜った。心から深謝申し上げたい。

本報告は、中長期的な視点からすれば、基礎調査の第一歩と位置づけられる。そのため、初年度の活動記録をなるべく正確に記しておきたいとの調査を行った内容を時系列的に説明しておきたい。

まずバンコクでは、現代文化の調査を目的とし、オルタナティブ・スペースやタイの映画人にインタビューを行った。その結果、30代から40代の映画人や文化関係者が、欧米を中心に海外留学を経て、「横」のネットワークを形成し、さらに強化している実態が明らかになった。

第2に、タイにおける華人ネットワークの特性を見出すべく、バンコクの華人社会の中心地・ヤワラーを踏査した。その結果、広東や潮州系の華人ネットワークが形成され、そのネットワーク形成に廟や華人の伝統行事が重要な役割を果たしていることが明らかになった。プーケットでは、旧市街地とビーチ沿いの観光地との社会関係を調査目的とした。その結果、旧市街地のプーケット・タウンを中心とする華人系の人びとと、観光地に移民したプーケット周辺の様々な国や地域の人びととの関係が、極めて複雑化し、移民と古くから居住している人びととの間に軋轢が発生している状況が明らかになった。あたかもプーケットという小さな地域で、東南アジア全体のアクチュアルな問題が凝縮されているかのようであった。以下、その具体的内容を記しておく。

1. バンコクにおける現代文化

バンコクにおける現代文化は、日本、大韓民国（以下、韓国と略称）、中華人民共和国（以下、中国と略称）、インド、欧米諸国など、様々なグローバルゼーションの影響を受け、同時期に（リアルタイムで）その反映がなされる、大変活気に満ちた「アジアン・シティ」のそれである。バンコクにおける現代文化の担い手の多くが、東南アジアの知識人や文化人と同様に、欧米を中心に海外滞在や留学経験を経ており、異文化交流や英語中心のコミュニケーション能力

に極めて長けている。

3月2日、京都大学東南アジア研究センター・バンコク事務所にて、同センターの清水展、片岡樹（同行研究者）、星川圭介の各氏と面会し、京都大学における東南アジア研究の方法論や交流とその戦略、将来像についてヒアリングを行った。京都大学東南アジアセンターや日本財団が実施するAPIフェローに関する事業は重要な活動であり、今後、東南アジア研究において中核的役割を果たすことと強く実感した。さらに東南アジアと地理的に近い、九州・熊本における東南アジア研究の充実化の必要性を痛感した。

同日夜、タイの映像作家、プッティポン・アルーンペン（現地同行者）とジャックラワル・ニルサムローン（映像作家・タマサート大学）と面会し、タイでの本研究調査の計画を確認した。2名とは、彼らが福岡と山口に滞在し作品制作を行った際、筆者が彼らの作品制作をボランティア支援や調査を行ったことから交流が始まり、現在も情報交換と交流を続けている。

3月3日、午前から午後、バンコクの繁華街、サイアム・スクエアを踏査した。サイアム・スクエアでは、日本のゲームや漫画店が数多く存在し、その人気も認知度も非常に高い。「ワン・ピース」「ナルト」「エヴァンゲリオン」「ブリーチ」「名探偵コナン」といった日本で人気が高い作品は、バンコクでもポケットでも非常に人気が高かった。店頭販売はもちろんのこと、人びとはwebをとおしてリアルタイムに膨大な日本のアニメやゲームの情報を入手して楽しんでいる。また、日本語の店名をつけた飲食店も散見され、日本への諧謔性や、アジア・モダニティとしての憧れのまなざしを感じた。

かつての活気を無くしたと聞いていたサイアム・スクエアだが、若者が多く見られ活気に満ちていた。その背景として、高架鉄道などインフラの整備と治安の安定化、華人系デパートの進出が考えられる。

同日午後からタマサート大学を訪問した。タマサート大学はバンコク市内と、数年前に新設された郊外北部に位置する芸術・工学・メディア系キャンパスが

ある。後者を訪れ、前述の研究同行者プッティポンと、同大学に講師として勤務しているジャックラワルの2人に紹介され、学内にあるスタジオや講義室など、充実した施設を見学した。ジャックラワルはそこに自らの映画スタッフや仲間を呼び、実践的な教育を行っている。このようにしてバンコクを中心とした映像作家の「横」のネットワークは広がっている。バンコクでは、ほとんどの映画関係者同士が知り合いであり、お互いの作品になんらかの形で制作協力し参加しているケースが多い。幸いなことに、その日は偶然、タイを代表する映像作家、ペンエーク・ラタナルアンの講演会があり、そこにタイの映像を学ぶ学生と共に参加することができた。ペンエークの講演は本人自ら英語とタイ語の両方で行った。なぜならペンエーク自身、ニューヨークでの活動経験があるからということと、タマサート大学には、東南アジアを中心とした留学生が多く、英語が日常的な共通言語になっていることもある。2時間の公演予定であったが、学生との熱心な質疑応答があり4時間にわたった。

こうした活動は残念ながら日本ではなかなか見られない。教員が学会などで集い情報交換やイベント行うことは多々あるが、学生の育成を目的とし、学生と教員、映画人が一体となった教育プログラムの充実度は低い。映画を評論し、批判するアカデミズムと、実践と制作とのバランスがとれているか否かが大変重要である。日本が前者で、バンコク（タイ）が後者である。日本では映画制作現場とアカデミズムや一般的な生涯教育を含めた教育現場との交流は、さほど親密ではなく閉塞感が強い。しかしバンコクでは、映画人同士が制作現場で築き上げたネットワークを教育現場に積極的に取り入れ、学生だけではなく、自らの創作活動の実践と結びつけようとしている。最大の要因は、経済的な理由であろう。ペンエークの講演料やそこに集う映画人、施設利用費、すべてボランティアである。こうした経済的な教育の開放性が、映画や映像教育において今後重要な課題ではないだろうか。

バンコクだけでなく、東南アジアの映像作家に共通する特性であるが、東南

アジアのほとんどの映像作家が、監督、脚本、カメラ、照明、音声、美術、俳優、ひいては音楽まで担当できる多才な人物が多い。もともと彼らは、映画だけでなくグラフィックや美術などを専攻し、「IT革命」以後、ノートPCやデジタルカメラを使用し、安価でできるようになった映像制作の活動も開始したのである。彼らはお互いの作品を制作する際、それぞれの役割を分担し、それぞれが監督する作品に携わっているのである。

2010年5月にタイ映画初、カンヌ映画祭でパルムドールを受賞したアピチャポン・ウィーラセタクンも、プッティポンやジャックラワルだけでなく、バンコクの映画人のほとんどは彼の現場に参加したことがあり、アピチャポンの知人だそうだ。アピチャポンがカンヌ・グランプリを受賞できた背景には、バンコクにおける多種多才な映画人同士の「横」のネットワークが非常に重要だったのである。

こうしたケースは以前調査した韓国でも散見できた。タイと韓国の共通点は、行政支援に基づいた教育システムとネットワークがあることである。相違点は、欧米での留学経験があるか否か、ひいては一か国での制作活動か否かである。韓国の場合、ネットワークがあっても、ほぼ国内に限られているが、東南アジアは数カ国に渡ってフレキシブルなネットワークが形成されている。たとえば、プッティポンの場合、2010年の上半期だけでもフィリピンでカメラマンをし、タイで自分の作品を制作し、別の作品をハンブルグ短編映画祭に出品した。

韓国の映画人は、手厚い行政支援に基づき、映画人同士で独立プロダクションを設立し、映画制作における役割分担が明確である。しかし、バンコクでは、行政などの支援はあるものの、各自が相互の作品制作を支援しようという相互扶助的なネットワークの性格であり、さらに、英語能力が高いため、バンコクだけでなく、マレーシア、フィリピン、シンガポール、インドネシアといった、東南アジアの優れた映画人同士の交流や共同プロジェクトが活発である。一言で言えば韓国は映画ビジネスの特性が強いのに対し、東南アジア地域では、国

際色の強い芸術作品への指向が強いのである。

3月3日の夕方は、インディペンデント研究者のシリラット・カタンチャリークンのオルタナティブ・スペースを訪問した。音楽スタジオやアート作品制作のコーディネーターやプロデューサーをしている彼女の自宅兼オルタナティブ・スペースは、ミーティング・ポイントとして若者に開放されている。シリラットは、プーケット出身で福建移民の3世にあたり蘇月桂という中国名もある。

その夜、プッティポン、ジャックラワル、チャットチャイ・チャイヨンの三人がシェアしているスタジオ兼工房ハウスを訪問した。チャットチャイはタイ映画最優秀衣装デザイン賞を受賞した映像作家でもある。

シリラットのオルタナティブ・スペースやプッティポンたちの共同制作ハウスなど、若い作家たちは制作スペースを確保し自らの制作活動をのびのびと行っている。彼らはわずかなスポンサーと自費で共同生活をしながら若者とも積極的に交流しようとしている。日本だとこうした場合、NPOなどを立ち上げるケースが多いが、タイや東南アジアの経済力は日本に比べると低く、経済的な面で工夫する、という発想にたくましさを感じる。

3月4日、午前はバンコクの華人街の基礎的な踏査を行った後、午後から、サイアム・スクエアにあるバンコク芸術文化センターを訪問した。タイ映画財団ディレクター、チャーリーダ・ウアブムルンジットと面会し、タイの映画制作や映画祭の状況をインタビューした。ここは、NPOのような半官半民の施設で、カフェスタイルをとっており、多くの人々に開放されているミーティング・ポイントでもある。タイ映画財団の事務局自体は、サイアム・スクエアから徒歩約10分のところにあり、カフェも含め、ボランティア・スタッフが5人で活動している。チャーリーダはタイ映画のキーパーソンであり、約10年間、タイのインディペンデント作品からメジャー作品までの紹介に携わり、彼女をとおして、タイの映画人たちの横のネットワークが広がっている。

2. プークェットにおける華人、ムスリム社会

3月5日、プークェットにてラーチャパット大学のタムロン教授に面会し、プークェット・タウンの旧市街地の踏査を開始した。

3月6日からは本格的に片岡氏、タムロン氏とプークェットの廟と華人、ムスリムのネットワークを調査した。プークェット・タウンには、華人ネットワークの痕跡が残っており、プークェットの行政も、それを新たな観光資源にしようとしているが、古くからいる華人ネットワークとの世代間交流がうまくいかず、新しい華人との関係がうまくいっていないようだ。

3月7日には、片岡氏と廟およびプークェット・タウンを継続調査し、大変興味深い廟を調査した。

旧市街地であるプークェット・タウンから、観光地であるパトン・ビーチに行く中間点の集落には、ムスリムの土着神（トラ）と関羽、観音を混交し祭祀した「廟」が数多く散見された。2004年末のインド洋大津波の被害や、大都市との貧困格差の拡大といった背景からか、プークェット周辺地域からムスリムが多く移住し、観光地のパトン・ビーチで生活している。こうした背景から廟の形態もムスリムと伝統的な中国の廟の要素が混雑するように近年変化しているのである。また廟では巡回映画が上映され、その入場料が廟への寄付金（2本立てで2,500バーツ）となる。旧来、東南アジアの廟においては、華人が定期的集って伝統行事を行う。その際に、地方伝統演劇を上演し、その入場料で廟の維持運営資金としていた。20世紀になると演劇だけではなく映画も上映されるようになり、その伝統的な廟の維持運営システムは、脈々と受け継がれていることが明らかになった。上映される映画はハリウッドでも中国映画でも何でもあり。映写機は約40年前の機材と思われるものだった。つまり、廟には、映画を上映することをきっかけとして、そこに集い情報交換しあい相互扶助する生活スタイルを継続するという最大の目的があるのである。

3. まとめ

以上の調査から、発展著しいアジアの現代文化の発展を実感したと共に、そこに、日本の現代文化の影響が色濃く繁栄していることが明らかになった。また、現代のタイの人々においても華人ネットワークは大変重要な意義があり、廟を中心に人びとの生活に深く浸透していることが明らかになった。

その特徴として、タイの華人ネットワークが、他の東南アジア地域の華僑とは異なり、広東・潮州との関係が深いことである。横の繋がりが強いと言われる秘密結社「紅幫」ではなく、縦の繋がりが強い「青幫」がタイでは広域に渡り浸透し、根付いていることを実感した。それはプーケットの廟において、華人の廟とムスリムの土着信仰が混淆されていることから伺い知れる。決して華人の信仰する神々とムスリムの土着心は一つになっていくのではなく、それぞれが一つの廟の屋根の下で、別々に祀られているのである。華人は華人、ムスリムはムスリム、タイはタイと、縦にネットワークが体系化された上で、廟が広範なミーティング・ポイントとして共存し共栄しようとしているのだ。

こうした背景からタイにおける近年の政情不安が生じているのかも知れない。「青幫」では縦のネットワークが強い反面、排他性が強いいため、商業的に成功するものとしめないものの境界が明確なのである。福建などの「紅幫」系の華僑、タイ東北部の農村の出稼ぎ移民やアンダマン海沿岸の人びとは、縦のネットワークに入り込まない限り排除されてしまう。このことが、現在のタイの政情不安の要因であるいわゆる「都市と農村の経済格差」を生む要因の一つではないだろうか。

地震や津波、政情不安、都市圏と農村部との貧困格差の拡大、それに伴う人びとの急激な大都市への移動は、東南アジアだけでなく、東アジア、ひいてはアジア全体で、ASEANの問題やネットワークを捉え、考察の対象としていくべきであろう。

（以上、西谷 郁）

II ミャンマー調査報告

筆者は、2010年3月5日から11日までの期間、NPO法人「わくわくガイア」の主催するスタディ・ツアーに参加し、ミャンマー連邦（以下「ミャンマー」という）において現地調査を行った。今回の現地調査では、ミャンマーにおける福祉施設や教育施設などを訪問・視察するとともに、ミャンマーでのボランティア活動を体験・視察し、さらにマンダレーの日本語学校の学生と交流を深めた。

今回のスタディ・ツアーは、既存の国際交流・貢献のプロジェクトを単に「視察」するだけではなく、参加者が自分でできることを現場でみつけて、ミャンマー人と一緒にボランティア活動を体験すること、すなわち国際協力の現場でボランティア体験を目的として、企画されたものである。それは、教育・文化を中心とする青少年国際交流のあり方を探ることを目的とした本研究プロジェクトの趣旨・目的にまさに合致するものである。

ところで、「わくわくガイア」は、2007年よりミャンマーにおける交流事業を開始し、修道院・孤児院・盲学校などとの交流・協力を続けている。具体的には、日本歌謡伝授・即興劇・有機農業・宿舍建築などの活動を通じて、ミャンマー人と日本人の助け合いを促進してきた。「日本人の知らない国」ミャンマー——特に、政府による管理・統制が厳しく、政治・社会情勢が不安定な国において、そのような活動実績のある団体（NPO）のアレンジがなければ現地調査はスムーズに、また効果的に行うことはできない。しかし、今回の調査では、このスタディ・ツアーに参加することで、僧侶の経営・管理する孤児院や盲学校、クリスチヤンの経営・管理する障害者施設や修道院（就業技術訓練学校）などを問題なく訪問・視察することができ、また関係者等にインタビューすることができた。これは非常に得難い経験となった。とりわけ「わくわくガイア」代表の横森健治氏にはこの場を借りて、厚く御礼申し上げたい。

また、同スタディ・ツアーには、ミャンマーにおいて様々な救済・ボランティ

ア活動をしている「プレーバックシアター」（即興劇団）の3名も同行した。同代表の大河内氏はミャンマー在住6年目で、ヤンゴンのホテルで日本人セールスマネージャーをしながら、同劇団を立ち上げた。彼のほかに、「難民を助ける会」（AAR: Association for Aid and Relief, JAPAN, Myanmar Office）のユユさんとマカインさん（両名ともミャンマー人で、今回の調査では通訳としても活躍した）も、この劇団員として参加した。プレーバックシアターの方々の協力にも、この場を借りて深く謝意を表したい。

本報告では、ミャンマーにおける現地調査の経過および活動内容などを報告した上で、現地調査を通して感じた筆者なりの若干のコメント（感想のレベルにとどまるが）を述べたいと思う。

1. 現地調査の概要

(1) 実施場所（訪問地）

ミャンマー連邦：ピンウールイン（メイミョ）、ナウンチャー、マンダレー、ヤンゴン。

(2) 実施期間

2010年3月5日（金）～10日（水）（日本着は翌11日（木））

(3) 現地調査の参加メンバー

NPO 法人「わくわくガイア」および NPO 法人「国際住民環境ネットワーク」 「アジア研究会議」の主催するスタディ・ツアーに参加。サイクロン災害での救援活動のほか、即興劇を主として様々なボランティア活動を行ってきた「プレーバックシアター」のメンバーたちもミャンマーで合流した。このほか、国際協力演習担当の大学教員や中国の障害者福祉を研究している大学教員も参加していた。

(4) 日程

スタディ・ツアーのスケジュールは、以下の通りであった。

- 3月5日（金） 日本→ミャンマー（各自で移動）
3月6日（土） ヤンゴン→メイミョ（孤児院）
3月7日（日） メイミョ（盲学校）、ナウンチャー（障害者施設）
3月8日（月） メイミョ（修道院）（孤児院）→マンダレーへ移動
3月9日（火） 日本語学校学生との交流（古都散策）→夜行バスでヤンゴンへ移動
3月10日（水） ヤンゴン（現地事情聴取）、解散（各自帰国）
3月11日（木） 日本着

なお、筆者は、スケジュールの都合上（現地調査の直前に他の用務が入るなど）と航空券の入手状況から、シンガポール経由でミャンマーに入国したため、3月6日からヤンゴンでツアーに合流した（3月5日はシンガポールに宿泊）。

2. 活動内容

調査活動の内容については、以下、実施日順に記述することにした。

(1) ドーピン孤児院

3月6日（土）、10時20分着の便でヤンゴン国際空港に到着し、スタディ・ツアーのメンバーと合流した。すぐに隣の国内空港で乗換えてマンダレーに出発した。マンダレーでは、ドーピン孤児院の車が出迎えてくれた。なお、メイミョおよびその周辺での4カ所の施設を訪問するにあたっては、すべてこの車を使用させて頂いた。最初の訪問地は、僧院に併設されたドーピン孤児院であり、15時頃に到着した。

ドーピン孤児院では、パンダワ僧侶が出迎えてくれた。彼が同孤児院の代表（運営・管理の最高責任者）であり、20余年前から孤児を受入れ、現在では750名を超えるという。この先1,000名に達しても孤児を受け入れ続けると説明された。当然、大勢の孤児を養うとなると運営・管理上とても大変であり、とりわけその財源をどのように確保するのが最大の課題となる。この点について

質問したところ、「孤児をたくさん養うことはそんなに大変なこととは思わない。むしろ、良いことをしているのだから、運営のことについても心配していない」と答えられた。財源やその他物資の調達については、毎日「お布施」をもらい、「お布施」をもらうためにも、社会的な善行を積んでいるとのことだった。

この点を若干補足すると、ミャンマーは上座部仏教の国であり、僧侶は非常に尊敬されており、僧院には確かにたくさんの「お布施」が集まってくる。筆者は2007年にもミャンマーでのスタディ・ツアーに参加し、同じくドーピン僧院を訪問した際、お布施（寄付）を集める活動にも同行させて頂いた。実際に、大勢の周辺住民が多くの金銭や物品を献進しており、その光景に驚かされた。これ以外にも、たくさんの方々が多種多様な形で僧侶が代表を務める孤児院に、寄進をしている（後述）。なお、政府その他の公的機関から何らかの支援や援助を受けているか、受けたことがあるのかと質問したところ、行政からの援助はほとんどなく、報奨として食料（お米）を少しばかり（孤児全員の1.5日分の食事に相当する量を）援助されたことがあるだけとのことだった。

16時頃、プレーバックシアターの3人が合流した。ドーピンのパンダワ僧侶に一人ずつ自己紹介した後、昨年、「わくわくガイア」のアレンジで建設した孤児宿舎を視察した。建物にはまだ家具や必要な器具が搬入されておらず、これから本格的に内部の整備に入るようだった。1階には小さな診療室が開設され、看護師2名（女性）が常駐していた。彼女たちは寄付された薬を使って、孤児院の子どものみならず周辺住民を無料で診療しているとのことだった。ただし、この診療施設は、現在、一時的に建物内にあるが、これから建設する2つの建物のどちらかに移転することが計画されているようである。1階にある3つの部屋は、将来計画している車両修理工場や有機農業のための材料部品倉庫に使用したいという意向であった。車の修理工場については、すでにシンガポール人の支援者がいるようだ。ドーピンの建物に対する寄進者は、他の日本人を含め

て他にもみられた。

ドーピンを訪問した3月6日は、偶然にも国軍大学の学生の寄進による校舎が完成し、寄贈式典が行われていた。その終了後に私たちのスタディ・ツアーの調査団が到着した関係で、その学生たちと対面し、いろいろと会話することができた。彼らによると、総工費は約300万円かかったそうだ。彼らは保守・管理のことも計画に盛り込み、今後も継続的に建物の維持・管理も約束していた。なぜ、ドーピンに寄付したのかと問うと、孤児の数が多く、一番協力を必要としている施設だからだと答えていた。

この日は、夕食をドーピン孤児院付属のシャン料理レストランでとり（ここでも温かい歓待を受けた）、ホテルに投宿した。

(2) ニェヤ盲学校、聖アノイシャス身障者施設

3月7日（日）は、ニェヤ盲学校と聖アノイシャス身障者施設を訪問した。

まず、午前中の訪問先はニェヤ盲学校である。ニェヤ盲学校は全寮制の共学で、現在100名の生徒が生活している。子どもたちには、小学生の段階から点字を教え、公立小学校に通学させ、その後、興味と能力に応じて、工芸、音楽、指圧、星占い等の技能研修の機会を与えている。校長自身も盲目の僧侶であり、民族・宗教等を問わず、目の不自由な生徒を受け入れて世話するとともに、教育と就業訓練を行っている。

「わくわくガイア」では、日本大使館に依頼して、草の根無償資金で校舎建設を開始したそうだ。当日もニェヤ盲学校を訪問した際、その建設の様子も視察した。1月15日の資金供与式から実際の建設工事が始まり、15人の従業員を1名の現場監督が指揮していた。この援助には、家具や教材は含まれないので、机や椅子のサンプルを展示して、一般から寄付を募っていた。このアイデアは、建設を請け負ったモーアウンさんの発案で、彼の個人資金でサンプル家具を購入し展示していた。「日本人がこれだけ助けてくれているのだから、家具などは自分たちで寄付を募って購入したいのです」と動機を述べていた。建物は、

基礎工事がほぼ終わり、順調に進めば8月ごろには完成の予定である。なお、こちらの建物は宿舎を含まず、部屋はすべて教室として使用するそうである。

スタディ・ツアー参加者は、ニューヤ盲学校での技能訓練に興味を持ち、目の不自由な学生の奏でるミャンマー民族音楽を拝聴した。訪問した直後は各自楽器の練習などをしていたが、私たちの訪問を知ると、とてもうまい演奏と歌声を聴かせてくれた。その後、指圧やタロット占いを体験した。筆者も日頃から肩凝りと腰痛には悩まされているが、生徒の指圧を受けると、すっかりいい気持ちになった。

午後からは、メイミョから東方に車で1時間ほどの距離にある、聖アロイシャスの身障者施設を訪問した。身障者施設には、シスター・マリアフローラに案内して頂いた。身障者は現在36名で、4人のシスターと一緒に住んで世話をしていた。ここには幼稚園が併設され、身障者と子どもたちが普段から一緒に遊んでいる。また、収入源として養鶏を営んでおり、500羽の鶏が400個近い卵を毎日産んでいるとのことだ。

私たちはまず一通り施設を視察しながら、同時にシスター・マリアフローラや4人のシスターに、いろいろと質問をした。今後も施設を大きくし、受け入れる身障者を増やす予定かを尋ねたところ、そのようにしたいと回答していた。しかし、そうなると、どのように管理・運営しているのか不安はないのか、とりわけ財源上の問題はどのようにクリアするのかなどを質問した。この点については、ミャンマーにおける教会関連施設は援助金に頼るだけでなく、収益事業を展開することで対処しているとのことだった。

つまり、ミャンマーではキリスト教徒の数が少なく、ドーピン孤児院の仏教とは違って、寄付も集まりにくい状況にある。その結果、どの教会でも自分たちで収益事業を展開しているようだ。この教会は中でも経営力に優れ、この施設以外でも養豚や農場経営で運営経費を捻出しているようだ。無論、外国の国際支援活動や海外のキリスト教会のネットワークを生かした援助金による

収入もあるが、それを有効活用し、事業を展開していくというわけである。このような収益事業のノウハウはNPOの事業と類似するところもあるが、いずれにせよ、この点には、仏教系施設との鮮明な違いをみることができた。

施設の見学やインタビューが終わった後、プレーバックシアターのメンバーは、障害者、付近の子どもたち、そしてスタディ・ツアー参加者を加えた30人のグループを作って、以下のようなゲームや遊びを一緒に行った。

- ①共通点さがし：好きな果物などを大きな声で言って仲間を見つける遊び。
- ②動物のものまね：日本とミャンマーで動物の鳴き声を聴き比べるゲーム。
- ③カエルの歌：日本語の歌詞を暗記し、全員で輪唱。

以上の遊びが終わると、身障者の人たちがお礼として賛美歌を歌ってくれた。この歌声がとても透明感があり、心を揺さぶられるものがあった。

(3) セレシアン修道院

3月8日(月)は、朝9時からメイミョ市場を訪れた。地元でとれる野菜、果物、朝食を提供する喫茶店、さらには中国製品であふれる露店(この辺にも、中国の影響力の拡大を垣間見ることができる)などを見て、1時間があっという間に過ぎた。ここは、ユユさんとマカインさんに案内してもらい、みやげ物などを購入した。

その後、ドーピン近くにあるセレシアン修道院に向かった。到着後、シスター・ロゼリンから施設の説明をして頂いた。ここも聖アノイシャスと同じように、カソリック系の教会であり、幼稚園、女性技能訓練学校、修道院を備えて、キリスト教の布教を行っている。

セレシアン修道院では、周辺地域から多くの女生徒が集まって共同生活をしながら、教育や技能訓練を受けている(なお、同じ施設内の幼稚園は男女を問わない)。女生徒の民族構成をみると、ビルマ族以外の少数民族の女生徒も多い。ミャンマーでは、大きく8つの部族、全体で135に及ぶ民族が存在するとされているが、セレシアン修道院では、民族を問わず、周辺の地域から女生徒を

たくさん受け入れている。

教育内容は、外国語（英語）、数学、理科、宗教教育（カソリック）、音楽などが行われており、技能訓練はミシンを使った服装の製作を中心に行われていた。実際に、その技能訓練の様子をみることができ、先生たちが熱心に指導するとともに、下級生や初心者には、上級生がアドバイスをしながら技能を教えていた。また、製作された服装の展示もみたが、これらの服装は実際に販売ないし出荷して、少なからぬ収益を得ているという。この辺の事業方法は、聖アノイシャスと同様のようだ。

施設訪問の後半は、調査チームと施設の女学生たちで、交流を深めるために、ゲームをすることとなった。ここでも、プレーバックシアターの3人が大活躍した。ワークショップを開催して、以下のプログラムを実施した。

- ①人集めゲーム：4人、5人と指定された人数のグループを速くつくるゲーム。
- ②フルーツバスケット：それぞれ参加者に果物の名前をつけて椅子を取り合うゲーム。
- ③エネルギーまわし：エネルギーを奇妙な格好で同じ方向にまわすゲーム。
- ④動く彫刻：参加者の心情を役者3人が体で表現するもの。

これに対し、技能訓練中の女生徒たちが賛美歌を清らかに歌い上げた。この歌声も信じられないくらいきれいで、胸に迫るものがあった。最後にシスターは、「ワークショップでお互いの気持ちや考えを分かり合えたのでとても楽しかったです。また来てほしいです」とコメントした。

この後、スタディ・ツアー参加者はドーピンに戻り、まとめの話し合い（中間総括ワークショップ）を行った。そしてメイミョでの活動を終えた後、スタディ・ツアーのチームは、車でマンダレーへ移動した（プレーバックシアターのグループは一足先にヤンゴンに移動した）。

夕方にはマンダレーのホテルに到着し、夜7時から Hito センターのガイドと

合流した。翌日の市内案内の打ち合わせのためである。Hitoセンターは、マンダレーでは最も有名な日本語学校である。「わくわくガイア」との結びつきも古く、10年以上もいろいろな活動で協力してきたようである。Hitoセンターからは、日本語教師の恵美奈さんが6名のガイドを引率し、細かい注意を与えていた。恵さんによると、日本人と直接交流する機会は貴重な機会であり、学生にとっても有意義なものであるとのことだった。翌日は、日本人1人に2名の日本語学校の学生ガイドをつけ、このチームごとに翌日は行動することになった。それぞれのチームが各々夕食をとりながら、自己紹介をしつつ市内散策の計画を立てた。

(4) 日本語学校の学生ガイドとのマンダレー市内散策

3月9日(火)は、日本語学校(Hitoセンター)の学生のガイドによるマンダレー市内の散策である。筆者のチームは朝7時半からマンダレー市内散策に出かけた。バイクの後部座席に乗っての移動だった。散策の内容は、マンダレー・ヒル、パゴダ、僧院、王宮、ゼージョー市場などで、市内の主要な観光地を訪れることができた。非常に丁寧な観光ガイドとともに、日常生活や恋愛話、将来の夢、そして日本に対する印象や日本への留学希望など、ミャンマー人の学生と様々な話ができ、非常に有意義であった。

ガイドの方の親切な計らいで、僧院の僧侶の食事の様子をみることもできた。ついでに、僧院からその食事をご馳走されることになった。これは非常に貴重な体験になった。

市内散策を終え、19時発の夜行バスでヤンゴンに出発した。夜行バスは日本の中古バスを使用しており、約11時間かかった。1つの席では狭く隣の席の人との接触が気になるので、1人に対し2席横並びに席をとった。ここでミャンマーの国情を反映している点を2つ述べたい。1つは、エアコンが効きすぎており、とても寒かった。日本から持ってきたオーバーを羽織っても効き目がなかった。ミャンマー人の多くはオーバーに毛布をかけて寝ている人が多かった。

もう一つは、バスが何度も止まって起こされた。2時間おきにトイレ・軽食休憩があるが、防犯のため、バスに居残ることは許されず、乗客は全員、バスから降ろされて強制的に休息させられた。とりわけ、熟睡中の深夜12時30分頃に、新首都のネピドーを通過するときに、ミャンマー人・外国人を問わずに身分証を調べるため、パスポートチェックがあった。しかも、私たちを調べた役人はあまり要領をえず、ビザの書き写しに20分近くを要するという事務処理の拙さもあった。

(5) 最終日

最終日、午前6時半、朝もやのヤンゴンにバスが到着した。ミャンマー式喫茶店で甘い紅茶を飲んでから、一行は日本人墓地へと移動した。日本国政府建立の慰霊塔、飛行機事故で死亡したJICA専門家の墓、明治時代にビルマに移り住んだ日本人の墓などに参拝した。なお、その日は、40名の日本人団体慰霊団が来る予定になっており、墓地では現地の墓守人たちが忙しく準備中だった。墓参りの後は、ヤンゴン中心部にある「アウンサン将軍市場」で買い物をし、水シャワーを済ませた後、お昼は日本人観光客が多く訪れる店の1つである「壺番館」という日本料理店に行った。その経営者にミャンマーの状況をヒアリングした。

昼食後、筆者は16:40発の便でシンガポールへと発ち、翌日帰国の途に着いた。

3. まとめと若干のコメント

今回の現地調査では、①僧侶の運営するドーピン孤児院（Doe Pin Orphanage Centre）と②同じくニェヤ盲学校（Nye Ya Blind School）、③カソリック教会である聖アノイシャスの運営する障害者施設（St. Aloysius's House of the Handicapped）、④女学生への職業教育を行っているセレシアン修道院（Salesian Sisters Centre）を視察するとともに、③④では児童や生徒たちと一緒にゲーム

をするなどして、楽しく交流することができた。また、マンダレーでは日本語学校学生のボランティア・ガイドによる市内散策を体験した。いずれも印象深いことばかりだったが、若干の感想を述べさせていただく。

まず個人的な関心から、「公共的な活動」の主体、あるいは社会サービスに対する行政の関わりといった点から若干のコメントをしたい。「公共的な活動」の定義は難しいが、ここでは、救貧・福祉・教育・民生といった公共の活動を誰が、どのように行うのかといった観点から捉えたい。冒頭の①～④の施設に共通するのは、宗教団体という公共的な存在が公共的な活動を担っているということである。行政の支援や関わりはみられなかった。特に印象に残ったことは、実施する手法が仏教とカトリックでは異なるようである。例えば、①をみて感じたのは、僧侶に対する高い敬意を背景に、多くの孤児を養う（その生活を保障し教育も行う）財源を、民衆からの“寄付（お布施）”に依存するマネジメントである。これに対して、③では、障害者福祉という公益的な活動を行っているが、言わば事業としての福祉ボランティアを展開しており、収益を上げ、それを更なる公益活動としての障害者福祉事業に充てている。非常に興味深いことであった。

次に、次世代を担う青少年の国際交流ないし国際協力など教育上の観点からコメントすると、訪問したメイミヨは、国際協力を学ぶツアーとしての魅力が高いと感じた。それは、「わくわくガイア」が多くの機関と連携し、かつ非常に深い信頼関係を築いているからでもあるが、社会福祉やボランティア、そして国際交流について、現場から実践的に学べるところが多いからである。例えば、福祉について、日本とは全く違う状況にあるが、改めて社会福祉とは何か、どのように行うべきか、考えさせられるところがある。日本の社会福祉は欧米、とりわけ北欧諸国に学べという風潮が強いが、こちらではまた違った視点等が学べると思われる。また、福祉施設のマネジメントという視点からも、興味深いことが学べるように思われる。

国際ボランティアの現場を学ぶという点について言えば、プレーバックシアターの方々の活動を一緒に体験するだけでも、日本人が海外でどのような国際協力活動を行っているのか、それはどのように協力相手の現場で貢献しているのかなどを実感することができる。また、ミャンマー人でも他の人のために頑張っている人も多いと理解できるし、こうしたことは日本の若い人たちにも是非知ってほしいことである。

最後に、全体を通して思うのは、ミャンマーの人々は一言で言って、ピュア（純粹無垢）な人が多く、ホスピタリティの精神に溢れ、非常によく歓待してくれるので、精神的に癒される。また、決して「便利」な「現代的生活」を送っているわけではないが、ミャンマーの人々は笑顔ばかりで、幸せ（幸福）そうに生き生きと暮らしている。そして、僧侶がその高い人徳、見識、品行などによって、人々から高い尊敬を集めている。さらに、民衆のモラルや規範的な行動意識は非常に高い（ちなみに、海外旅行で心配されるスリやぼったくり、詐欺などに巻き込まれる心配をする必要がない）。民衆は、信仰心に基づき直接的に宗教的な行為を行うわけではないが、仏教の教えは人々の心の中および生活の中に深く浸透し、それは高いモラルや規範的意識となって、民衆の行動に表れているように感じられる。

（以上、上拂耕生）

Ⅲ 在熊 NPO による日・タイ両国の社会福祉人材育成事業の課題

本章では、熊本県内に事務所を構える NPO の「日・タイ両国の社会福祉等に関する交流事業」の課題について、同事業の報告書に盛り込まれた内容を手がかりに整理・報告する。

本研究プロジェクトのテーマが包含する研究課題は、①東アジア協力を担う次世代の「共通のアイデンティティ」は如何なるものか、そして、②その「共

通のアイデンティティ」を醸成するには、如何なる方途が有効であるか、といった2点を解明すること、というのが筆者の基本認識である。ここに報告する在熊NPOの取り組みは、上記②の一つである。

報告に先立って、ごく簡単に、東アジア協力を担う次世代に「共有されうる」アイデンティティについて筆者なりの見解を示せば「老いてゆくアジア」³という日常的な現実を共有し、如何に取り組むかということであると考える。急速に進行する「高齢化」は、日・タイ両国、ひろくは、東アジア諸国における共通の課題であり、次世代が一丸となって挑戦を迫られる課題である。次世代が、この共通の課題を認識し、何らかのアクションを起こすことによって「共通のアイデンティティ」が醸成されうると考える。この点において、小論で報告する在熊NPOの取り組みは、社会福祉人材の育成を目的に掲げており、東アジア協力を担う次世代の育成に寄与するものである。

この在熊NPOの事業の実施・運営体制は、大きく実行委員会と事務局という二つの組織から構成されている。実行委員会は、本事業の趣旨に賛同する社会福祉関係者（主に研修の受け入れ先となる施設の施設長）、教育関係者、メディア関係者を中核メンバーとし、事業内容・予算等の承認や事業の要である宿泊研修の受け入れ等についての協力依頼などが主たる役割である。事務局は、実行委員会で審議する事業計画の骨子や具体的内容の草案を作成したり、当日のボランティア・スタッフや通訳ボランティア等の手配を行ったりする。構成員は、社会福祉関係者、後述する「熊本たけのこ会」関係者、在熊タイ人、そして、筆者自身のような大学に所属するものと様々であり、筆者自身は、2008年11月から2010年3月の間、事務局員兼実行委員として本事業に携わった。

3 大泉啓一郎『老いてゆくアジア——繁栄の構図が変わるとき——』中央公論社（中公新書）、2007年。

1. 事業の目的と研修概要

本事業は、2006年1月、「社団法人熊本たけのこ会」⁴が、スマトラ沖大地震及びインド洋津波により被災したタイ王国パンガー県を講演で訪ねた際、タイの貧困問題、そして、福祉が十分に行き届いていないという実態を目の当たりにしたところに構想の起点がある。

翌2007年、「日・タイ修好120周年」⁵の節目の年に、熊本県内の社会福祉に携わる有志からなるボランティア・グループが、タイと日本の社会福祉の充実・発展を願い、交流を通じた人材育成を目的として始動した。

具体的には、タイ王国の中で、社会福祉学部を設置している2大学のうち、タマサート大学社会福祉学部⁵に学ぶ向学心旺盛な学部生、大学院生（6名）を約1カ月間、熊本に招聘し、県内の児童養護施設および特別養護老人ホームでの宿泊研修などを通して、将来、タイの社会福祉等の分野においてリーダーとなる人材の育成を支援・促進することを目的とするものであった。

初年度である2007年度の研修生は、帰国後、タマサート大学社会福祉学部で教鞭をとり人材育成や同国の社会福祉に真に役立つ研究に取り組んだり、社会福祉分野で活躍するNGO等の一員として日夜現場で奮闘したりしている。

2. 事業実施に関わる諸課題

事業実施上の諸課題について2007年度ならびに2008年度の報告書に記載された内容を分析すると、下の表1に示すように、(1)人材に関わる課題、(2)事業費に関わる課題、(3)研修内容に関わる課題の3つに整理が可能である。

⁴ 社団法人熊本たけのこ会 <http://www.geocities.jp/kumamototakenokokai/>（2010年7月23日閲覧）

⁵ 2007年は、1887年の「日タイ修好宣言」調印から120年目にあたる。
<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/thailand/jpth120/index.html>（2010年7月23日閲覧）

表1 事業実施に関わる課題（2007年度ならびに2008年度）

	2007年度	2008年度
人 材	(1)通訳の確保 (2)専門性の高い通訳の確保 (3)ボランティア・スタッフの確保	(1)専門性の高い通訳の確保 (2)ボランティア・スタッフの確保
事 業 費	(1)事業費が不十分	(1)事業費が不十分
研修内容	(1)宿泊研修内容の検討が不十分 (2)事業の実効性の検証作業の欠如	(1)宿泊研修内容の検討が不十分

出典) 事業報告書をもとに筆者作成。

以上に示した諸課題について2007年度、2008年度に共通する課題について、筆者自身の経験を加味しながら整理すると次のようになる。

第一に、ボランティア・スタッフの確保という課題は、研修生がバンコクから福岡空港に到着した際に出迎えに行くスタッフ、宿泊研修以外の保育園等の施設の視察・見学の際の随行や、食事の世話などをするスタッフの不足であるが、これらのアテンドが必要なのは主に平日であり、それぞれに仕事を持っている事務局員スタッフはアテンドすることが難しい。こうした現状を改善するには、より多くのボランティア・スタッフを確保することが必要である。

第二に、通訳の確保に関しては、2008年度の新しい協力者に加えて、2007年度参加者の多くが引き続き協力を引き受けてくれたことにより、若干の改善が図られつつある。また、2009年度には、通訳ボランティアを対象として日本の社会福祉等について学んでもらう事前研修を実施するという改善策も講じられている。

第三に、事業費が不十分という課題に関しては、単に、資金が量的に不足しているというよりは、必要な事柄に必要なだけ支出されているのか、という点検が必要な課題である。下の表2は、2008年度の事業費の内訳を示したものである。

事業費の内訳を見ると、最も多い支出は、費用全体の53.6%を占める研修生の宿泊費ならびに食費であり、その次に多いのは、33.5%を占める研修生の往

復航空券ならびに通訳ボランティアの交通費となっている。これらの支出について、筆者は参加して関わりを深めて行く過程で次の2つの疑問を持った。一つは、派遣元のタマサート大学側が負担する経費はどれくらいなのか、もう一つは、通訳「ボランティア」と称しているにも拘わらず、交通費、宿泊費そして謝礼を支給するのか、という点である。前者に関しては、タイ側の負担はほとんどなく、ほぼ全ての経費を日本側が支出しているということであった。そこには、いわゆる旧態依然とした「途上国タイ、先進国日本」という枠組みに囚われたNPO関係者の意識が見て取れる。と同時に、真にタマサート大学はこの研修を必要としているのか、換言すれば「援助の押し売り」になっていないか、という疑問を抱かざるを得ない。

表2 日・タイ両国の社会福祉等に関する交流事業支出内訳（2008年度）

支 出 の 部			
費 目	決算額(円)	総計に占める割合(%)	明 細
研 修 費	1,378,386	53.6	研修生宿泊費、研修生食費 他
旅 費	861,945	33.5	研修生旅費、通訳旅費 他
謝 礼	100,000	3.9	通訳謝礼
印 刷 費	100,000	3.9	報告書作成費
事 務 費	83,624	3.2	切手・通信費、文具品 他
会 議 費	49,412	1.9	運営会議費
総 計	2,573,367	100	

出典)『日・タイの社会福祉等に関する交流事業報告書』2009年、8頁をもとに筆者作成。

後者に関しては、通訳ボランティアのほとんどが、タイからの留学生である点に鑑みれば、母国への貢献という心、あるいは来世のために功德を積むという上座部仏教の「タンブン」という理解があれば、交通費、宿泊費、謝礼を支払うことは必ずしも必要ではないと考えられる。また、「無償性」というボラン

ティアの特徴の一つに照らしてみても再考の余地が十二分にあると考えられる。

第四に、宿泊研修内容の検討が不十分であるという点に関しては、とくに、施設での宿泊研修の内容については、施設側にお任せしているのが現状であり、施設側にとって研修生が何を知っていて、何を知らず、何を学びたいのかが不明瞭であり、施設側に大きな負担をかけてしまうことに繋がっている。結果的には、それぞれの施設の特徴が生かされた研修内容が提供されているものの、タイの社会福祉等の分野においてリーダーとなる人材の育成を支援・促進するという所期の目的に照らすとより体系的な内容へと改善する余地が残されていると考えられる。

以上に整理した課題についてさらに考察を加えると、筆者は、次の一つのより本質的・根本的な課題が浮き彫りになると考える。それは、本事業に対する運営側の理念・ミッション共有の欠如である。この課題は、筆者自身が参加した当初から疑問を抱いていた点の一つである。事業の理念・ミッション、すなわち、何のための事業なのか、どのような意義があるのか、といった点が参加者全体で共有されないままに事業が実施されているという現状である。故に、人材に関わる課題として、ボランティア・スタッフを募る際、本事業の意義ないし重要性を共有してもらうことに難しさが生じており、結果としてボランティア・スタッフの数が増えない。また、研修内容に関わる課題として、運営側で目的が共有されていないために、施設側としても宿泊研修の内容について手探り状態が続いているという結果を招いていると考えられるのである。こうした事業の理念・ミッションの共有がなされていないことによって、事務局員からは、研修期間中に起きた様々な出来事にどのように対応すれば良いのか戸惑った場面が多々あったとの声が出ている⁶。運営の指示系統や事業の目的などが共有できていれば、現場での戸惑いを抱くことも少なかったのではないか、という意見も出ている。

3. まとめ

本事業は確かにタイの学生諸氏にとっての貴重な学習経験の場を提供してきた。と同時に、研修を受け入れる施設の職員の方々にとっても日々の実践を振り返る良い機会になっているであろう。また、同事業の運営に携わったボランティア・スタッフの一人一人が、少しずつではあるがタイへの理解を深めることにも繋がっている。両国の友好を支えるこのような草の根的な交流活動の一層の充実と継続が望まれる。そのためにも上述した課題の改善を願ってやまない。

【主要参考文献・資料】

大泉啓一郎『老いてゆくアジア——繁栄の構図が変わるとき——』中央公論社（中公新書）、2007年。

外務省ホームページ「2007年日タイ修好120周年」

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/thailand/jpth120/index.html>（2010年7月23日閲覧）

社団法人熊本たけのこ会ホームページ <http://www.geocities.jp/kumamototakenokokai/>
（2010年7月23日閲覧）

タイ国の福祉人材育成と社会福祉の普及・啓発事業実行委員会『タイ国の福祉人材育成と社会福祉の普及・啓発事業——タイ国ソーシャルワーカー交流支援プロジェクト——事業報告書』平成20年4月。

日・タイ両国の社会福祉等に関する交流事業実行委員会『日・タイ両国の社会福祉等に関する交流事業報告書』2009年7月。

（以上、牧 貴愛）

-
- 6 一例を挙げれば、研修生から宿泊研修期間中の土日に県外に出かけ友人・知人と会いたい、といった要望が出た。その際、運営側からは「遊びではなく研修に来ているのだから言語道断」という声が上がった。一方で「研修」の中身を勘案すると必ずしも言語道断とまで言い切れない、という声もあった。結論としては、研修生の安全を確保する、という理由で要望は認めなかった。